

Gakuvo「学生ボランティア拡大委員会」 報告書

Gakuvo

日本財団学生ボランティアセンター

Gakuvo「学生ボランティア拡大委員会」 報告書

目次

1. はじめに	1
2. 委員紹介	2
3. 議事録.....	4
1) 第1回委員会 要約	4
2) 第2回委員会 要約	5
3) 第3回委員会 要約	6
4) 第4回委員会 要約	7
まとめ	8
4. 参考資料	9
5. おわりに	10

1. はじめに

日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）は2000年4月に設立され、今年で5年目を迎える。その間、各大学と協力協定を結び、ボランティア活動を通じた人材育成を大学と協働して推進してきた。また東日本大震災被災地や、台風ハイエンの被害を受けたフィリピンクリオン島への学生ボランティア派遣などをはじめとして、さまざまな事業を行ってきた。

Gakuvoにとってこの5年間とは、まさに「走りながら考える」5年間だった。

しかし「走りながら考えた」5年だったからこそ、次の5年を見据え、いまここで、「立ち止まって考える」ことも必要であろう。ここで「考える」とは、大学生のあいだでボランティアが浸透するために必要な方策を考えることであり、またその前提として現代社会を生きる若者にとってこの社会とはどのように映り、そのなかで若者は、どのようなことを感じているのかを考えることである。

この5年、Gakuvoは限られたマンパワーで走ってきた。しかし次の5年を考えるという重要な地点にあたって、この方面の多くの識者から広く教えを乞うことが必要であろう。

「学生ボランティア拡大委員会」はこのような考えから実施された。メンバーには、大学、メディア、NPOなど幅広い分野から、前線で活躍する方々を委員にお迎えした。多忙な中、委員会にご参画いただいた委員の方にこの場を借りて御礼申し上げたい。

日本財団学生ボランティアセンター
代表理事 西尾 雄志

2. 委員紹介

大学関係

原田 勝広 氏 (関東)

- ・ 明治学院大学ボランティアセンター長
- ・ 明治学院大学教養教育センター教授
- ・ Gakuvo 理事

※元日本経済新聞国際部編集委員。大学と他機関との連携事業多数実施。

栗田 充治 氏 (関東)

- ・ 亜細亜大学国際関係学部国際関係学科教授
- ・ 日本ボランティア学習協会事務局長 (副代表)

※全国的な学生ボランティア支援に関して造詣が深い。

小島 祥美 氏 (東海)

- ・ 愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター運営委員
- ・ 愛知淑徳大学文学部教育学科准教授

※東海圏で、大学と他機関との連携事業を実施。東海圏のキーパーソン。

百合野 正博 氏 (関西)

- ・ 同志社大学商学部商学研究科教授

※同志社大学地域連携教育事業 (プロジェクト科目) など、地域連携教育に積極的に活動。

吉村 充功 氏 (九州)

- ・ 日本文理大学人間力育成センターセンター長
- ・ 日本文理大学工学部建築学科准教授

※ボランティア活動を導入した大学改革を理事長指導の下実施中。初年度教育などで全国的に評価。

桑原 留美 氏 (関東)

- ・ Gakuvo 学生理事
- ・ 早稲田大学文化構想学部 4 年

※学生 (元インターン)

メディア

松本 美奈 氏 (関東)

- ・ 読売新聞東京本社編集局教育部編集委員

※読売新聞教育ルネッサンス (大学関係者にとって最も関心の高い新聞特集) 元キャップ。
全国の先進事例の通曉。

NPO

工藤 紘生 氏 (関東) ○委員長

- ・ 一般社団法人 SoLaBo 代表

※SoLaBo: 若者に対する就職支援活動 (ジョブヨク) を関東を中心に展開。シブヤ大学初代事務局長・理事。元博報堂社員として、他機関との連携イベントを多数手掛ける。コーディネート経験豊富。

渡辺 一馬 氏 (東北)

- ・ 一般社団法人ワカツク代表理事

※東北地域で学生支援を行う中心的人物。Gakuvo 東北事業における協力者。東北地域にて、他機関との連携事業多数実施。

行政

小野 保 氏 (関東) ○オブザーバー

- ・ 文部科学省スポーツ青少年局青少年体験活動推進専門官

3. 議事録

1) 第1回委員会要約 (2014年6月10日)

・テーマ：各委員の実践取組報告

・明治学院大学の取り組みについて。「1 Day for Others」他 (原田委員)

明治学院大学ボランティアセンターの取り組み「1 Day for Others」は、新入生を中心に、まず1日ボランティアやインターンを経験してもらおうというもの。約60のプログラムを用意し、約600人が参加している。参加後、自分でボランティアをするようになる学生も増えている。

また、大学にて、ボランティアに単位をあげるか否かが問題となっている。「単位が欲しいからやるのは本来のボランティアの姿ではない」という考え方と、「教育の場なので、もう少し授業と結びつけたらいいのではないか」という考え方がある。

・仙台の学生ボランティアの現状、及び「社団法人ワカツク」の活動 (渡辺委員)

東日本大震災後「ワカツク」を立ち上げ、震災復興を主とした、ボランティアやインターンのコーディネート事業を展開している。(資料I-①) 震災直後には、避難所で困っている方を“見える化”する「避難所の調査」というボランティアを行い、延べ数千人の学生が参加した。震災から時間が経った今、「自分が今さら関わっていいのだろうか？」と思う学生が多くなっている。その現状を変えたいと考え、学生ボランティア団体の側面支援、効率的なマネジメントのための講座開催などを行っている。事前に活動をすればするほど、次に震災が起きた際に助けられる人の数が増える、準備が無駄になることはない、と考え、全国の学生ボランティアの推進を進めたい。

・日本文理大学 (大分市) の人間力育成センターの取り組み (吉村委員)

日本文理大学では、教育改革の象徴として、2007年に「人間力育成センター」を設置。どうやったら学生の人間力がつくかを考え、行き着いた先の1つがボランティア活動だった。人間力重視であり、「まずボランティアありき」ではない所が特徴的である。地域の企業や団体と連携して、商品開発や祭りのプロデュース等、課題設定をして取り組むPBL型の授業を組み立てた。また、入学したての学生には、学びの動機付けをしっかりとしなければならぬと感じ、地域の一次産業の手伝いをする体験活動を行っている。(資料I-②)

・読売新聞「大学の實力」調査から (松本委員)

取材で大学の現場を数多く歩いて来た。今、「勉強したくないけどなんとなく進学した」という学生が多くいて、大学側は学生にどうやって火をつけるか、様々な工夫をしている。一昔前だったら過保護だと言われるような、保護者会、三者面談、親に成績表を送付、就活面談、等を行っている大学が大多数。また、2012年の調査では、ボランティア活動に単位を出した大学は約4割。Gakuvoの5ヶ年計画で、どう大学と連携するか、を考える前に、今の大学の実情を見なければならぬ。(資料I-③)

事例報告を受けて、原田委員からは、大学同士だけでは横のつながりが生まれにくいので、NPOや企業、地域を巻き込んでいく事が必要なのかもしれない、という意見をいただいた。吉村委員からは、全国展開して、違う大学の学生同士も組織的につながれるような仕組みがあってもいい、というお話があった。松本委員からは、「ボランティアとは何か」の定義付けをする必要があるというご指摘をいただいた。

2) 第2回委員会要約(2014年7月2日)

・テーマ:現代の学生が置かれている状況

・現代の若者に関するデータ紹介

- ・日本の若者の自己肯定感は低く、つまらない、やる気が出ないと感じている割合は高い(内閣府「子ども・若者白書(平成26年度)」)。(資料Ⅱ-②)(事務局西尾)
- ・「社会に貢献したい」「社会を良くしていきたい」と考える若者は60%以上(厚生労働省「若者の意識に関する調査(平成25年9月)」)。**48.9%**の大学生が、「ボランティアに興味がある」と答えている(内閣府「社会意識に関する世論調査(平成25年)」)。(工藤委員長)

・現代の学生について自由討論(発言順)

- ・授業以外に学習をせず、講習会や講演会への参加もほとんどない。(百合野委員)
- ・ボランティアや社会貢献への関心は強いが、自分から動けない。(原田委員)
- ・「1 Day for others」のプログラムでは、“ボランティア”は人気がなく、“NPO・NGO・社会起業家”や“企業CSR”は人気がある。学生は、いわゆる福祉的な事ではなく、社会の問題を解決する事に関心がある。(資料Ⅱ-③)(原田委員)
- ・「ボランティア」という言葉のイメージが嫌い。(原田委員)
- ・東北でも、「ボランティア」という言葉を苦手とする学生が多い。特に震災当初に参加しなかった罪悪感を持っている人は「今さら参加は無理だろう」と斜に構えている。「ボランティア」と言うよりも、1つのプロジェクト、と言うと参加しやすくなるのでは。(渡辺委員)
- ・確かに「ボランティアやっている」と言にくい。「意識高いね」「えらいね」と言われる事がとても多い。言い方を変えて呼びかけたら、参加する人は多くなるのでは。(桑原委員)
- ・日本文理大学では、極力「ボランティア」という言葉を使わない。代わりに「社会参画」という言葉をよく使う。「自分がやってあげている」のではなく、「自分の成長につながる」「感謝して行かなくてはいけない」という事を学生に言っている。(吉村委員)
- ・「かっこいい」などシンプルな言葉で、もっと簡単に学生がボランティアに入って行けるようにしたらいいのではないか。(小野氏)
- ・授業で学生に「夢」を書かせたところ、6割程が、「卒業してそれなりの会社に勤めて結婚して子ども1人つくって幸せに暮らしたい」と書いてきた。これは当たり前のこと。「夢」と言うのはおかしい。(工藤委員長)
- ・「ボランティア嫌い」という学生には食わず嫌いが多い。とりあえずやってみる事が大事なのではないか。(原田委員)
- ・同志社大学の学生会館には、学生が集まらなくなっていたが、ラーニング commons の空間を備えた、ファッションナブルな建物にすると、再び集まるようになった。新たなニーズを生むような形で提案すると、学生はそれに乗ってくる。(百合野委員)
- ・「タッチポイント」や「サードプレイス」を上手く演出して仕掛けていくことが必要。すると、ボリュームゾーンが「面白そうだな」と足を踏み入れるのではないか。(工藤委員長)
- ・日本文理大学における nEQ テストの結果、「社会意識」や「対人関係維持能力」が入学時より2年の終わりに高くなった。人間力育成の取り組みの成果が表れている。(資料Ⅱ-④)

現代の学生の特徴として、①社会貢献意識は高いが、自己肯定感は低い。②社会を自分の力で変えられるという意識が低い。③「ボランティア」という言葉に違和感、苦手意識を持っている。という点が挙げられた。学生にリーチする際には、「かっこいい」「ファッションナブル」「社会を変える」「居場所」「自分を変える」等、学生の心に訴えかけるワードも重要である。また、大人はきっかけを与えることに終始し、ゆくゆくは先輩から後輩へ伝える文化が出来ると良い。

3) 第3回委員会要約 (2014年7月28日)

・テーマ：日本における学生ボランティアの普及・定着に向けての課題

・全国ネットワークの構築について

- ・全国の学生ボランティアと支援者の交流と学びの場として「学生ボランティアフォーラム」が開催されている。(参加者：第1回約350人、第2回約400人、来年第3回) 学生は、自分の活動が本当に役に立っているのか、全国的にどういう位置にあるのか、を知りたがっている。そこをどう伝えるかを考える必要がある。(栗田委員)
- ・「学生ボランティアフォーラム」は、学生への刺激になり、教職員が入ったネットワークをつくる機会にもなっている。今後は、テーマ毎に集まる形が必要とされていくと思う。以前の「ボランティア365」のような、全国的な若者ボランティアの支援体制が無くなった今、自分の大学にボランティアセンターがあるかないかで学生の活動がかなり左右されてしまう。そういった点からも全国的な支援組織は必要だ。(事務局西尾)
- ・東海は、地元愛が非常に強い地域。愛知淑徳大学のコミュニティ・コラボレーション・センターでは、地元愛に訴えて地域の課題を解決するやり方が上手くいっている。(資料Ⅲ-②③) 「学生ボランティアフォーラム」に参加した学生には、「東海地域だけでは駄目だ」という思いが芽生えてきたところ。現在の地域での取り組みが全国につながっていったら良い。
- ・大学の枠を超えた仕組みを Gakuvo が請け負うのは良いと思う。理想的なボランティア活動に助成金を出す等の支援システムがあると PR になり、全国的な学生ボランティアの普及につながっていくのではないかと。(オブザーバー小野氏)
- ・ボランティアセンターをやってきて困るのは、他大学と相談出来ない、バラバラに活動している事。東日本大震災の時は、大学間、NPO、企業等のパートナーシップがあったのに生かされていない。恒常的な仕組みが必要。全国組織には企業や NPO を呼ぶと良い。(原田委員)

・情報伝達の方法、教職員の課題について

- ・先生が社会を見ているとはあまり思えない。教職員を育てる事が先決かもしれない。(松本委員)
- ・大学でボランティアに取り組み始めた文化を継承するため、教職員向けの研修をするのはありだと思う。外部組織の Gakuvo はそれが中立的に出来る。(渡辺委員)
- ・ボランティアセンターや積極的な教職員、事務局経由で学生に伝えるルートが良い。ソーシャルメディアは、数百万人の学生相手だと有効ではないと思う。(渡辺委員)
- ・情報伝達のターゲットにするのは学生課だと思う。ボランティアセンターは無い大学もあるし、入れ物だけになってしまっている所も多い。(松本委員)
- ・活動している先輩を見て「あの人カッコいい」と入ってくる部分もある。電子媒体はサブ的に使い、「人」をキーワードにした全国展開の方法があると思う。(小島委員)
- ・教育学部系の学生は教育関係以外には無関心でボランティアに縁遠い。将来教育の現場で働く際にボランティアに携われるのか、甚だ疑問である。次世代育成という点で、教育学部系の学生を視野に入れることは意味がある。(小島委員)
- ・大学職員の唯一の学会である「大学行政管理学会」と協力して、分科会を設けてもらったり、一緒に教職員の研修をするのはどうか。(松本委員)
- ・大学関係者のみだと広がらないので、企業のリソースを使う事がとても大事。(原田委員)

全国ネットワークの構築については、「必要性が大いにあり、それこそ Gakuvo が出来ることだ」というご意見をいただいた。その運営の際には、大学だけでなく、企業・NPO・NGO・行政と連携する必要、利点がある。情報伝達については、「教職員を育てつつ、学生課やボランティアセンターから学生に伝達されるとよい」「カッコいい先輩、教育学部系の学生など、人がキーになることもある」といった見解のお話をいただいた。

4) 第4回委員会要約 (2014年8月20日)

- ・テーマ：具体的ボランティアプログラム・事業の検討・提案

(+12月に開催する「学生ボランティア集会」に盛り込む内容について)

・Gakuvoが行う具体的ボランティアプログラム・事業について

- ・ 2005年頃、ボランティアを装った団体による学生の被害がよく起きた。日本財団の信用は堅いので、財団が企画を立て学生を集めて活動する事は、基本になりうる。(百合野委員)
- ・ 大学には出来なくてGakuvoに期待することの1つは金銭面。資金を集められるので、その時々にあった活動を仕掛けられるし、緊急時の対応も可能。次に、全国的な情報の収集と発信。例えば、全国の学生記者から情報をもらって、全国の動きを吸収する。(栗田委員)
- ・ 九州などの地方から東京に行くとなると、お金と時間がとてもかかる。そこで、ボランティア集会等の「パブリックビューイング」をするのはどうだろうか。(吉村委員)
- ・ 団体や活動を保証できる「日本財団印」「Gakuvo印」のようなものを、団体やコーディネーターにつけるのはどうか。(渡辺委員)
- ・ 大学の中にGakuvoの支部、学生組織の様なものが出来るとしたら、大学組織とつながるか、直接学生とつながるかの2通りが考えられる。(百合野委員) そういった場合に、資金援助などの支援体制があれば、活動の継続性と学生のモチベーションがあがる。(工藤委員長)
- ・ 全国の学生ボランティアの取り組みを表彰するような仕組みがあれば、コア層のネットワークは徐々に出来てくると思う。(オブザーバー小野氏)
- ・ 「ボランティアとは何か」の定義をずっと考えてきた。出て来たのは「有償無償問わず、社会をよりよく住みやすくするための手法の一つ」というもの。ここに例示はせず、肉付けは各自してくださいという形で提示して見るのはどうだろうか。(松本委員)
- ・ 「社会をよりよく」という点を、Gakuvoのブランディングとしてはっきりと表示していくと、面白いメッセージになると思う。学生の活動の中では、自分の存在意義の確認は出来ても、「社会をよりよく」というところまではなかなかいかない。(栗田委員)
- ・ 自分の世界から出ない学生や背後の大人を引っ張り込むには、利益をアピールした戦略的なキャッチコピーが必要。例えば「よりかっこよく生きるために～あなたの学びで社会を変える～」。(松本委員)
- ・ 親や教職員を動かすには「数値」が必要。「5年間でこれだけの計画が動き始めました」と実績として伝える。参加してくれる人に「なるほど」と思わせないと続かない。(松本委員)
- ・ 日本人は学生時代と社会に出てからがあまりにもかけ離れている。ボランティアを推進しても、学生時代だけで終わってしまうのがもったいない。社会に出てからも色々な事を出来る人生を教えてあげたら、将来のプランが広がっていくのではないか。(百合野委員)
- ・ 「かっこいい大人」のロールモデル、仕事しながらもボランティアは出来る事、を示せば、学生ボランティアで途切れないのではないか。ボランティアは特別な事ではなく、生き方の1つだと教えてあげたい。(吉村委員)
- ・ 学生でありNPOのスタッフでもあるような、複数の役割を持つことを推進したい。特に地方では、誰も拾わない問題が放置されているので、何足ものわらじをはくことが重要。(渡辺委員)

・12月のイベント「学生ボランティア集会」の内容の提案

- ・ 学生は企業名やブランドよりも、社会貢献やCSRを重要視するようになってきている。年代が近く、自分にも出来そうな範囲で活躍している人を招いて話が聞けると良い。(小島委員)
- ・ TFTを取り上げたらどうか。全国組織でネットワークも強い。(小島委員)

- ・ 「あなたの学びで社会をどう変えるか」をテーマにしたら、学生は考えやすくなると思う。また、やりっ放しではなく、グループディスカッション→具体的な計画の提示→数ヶ月後に集まって進捗状況を報告、という流れをつくる。学生の居場所にもなる。誰かがどこかで見てくれている事はとても大事。誰も見ていないと学生は動かない。定期的な場を設け、発表させる。(松本委員)

・各委員の意見を受けて事務局より

- ・ 12月のイベントのターゲットは、中間層（ボランティアに少し興味はあるけれど積極的ではない層）を考えている。また、働くことのイメージを持ってもらえるような中身にしたい。「偽善的なボランティア」と違うメッセージを発してくれる方に基調講演をお願いし、分科会で2～30代の社会起業家、NPOなど、「カッコいい」と思われる方に来ていただいて、交流し、行動につなげられるような仕組みにしたい。
- ・ 居場所をつくる、見てくれる人がいる、というお話があったが、イベントを仕掛けるにしてもこの「居場所と承認」の観点を大事にしたい。
- ・ Gakuvoと大学組織、学生組織のつながりに関しては、資金援助も含め、今後検討していくべき課題だ。

5) まとめ

学生の質は変化した。現代の大学生は、社会貢献をしたいという意識はあるが、積極性に欠け、自分から動けない場合が多い。放っておいてもボランティア活動をする学生は少なくなり、大学がボランティア活動の推進に取り組むケースが増えている。

しかし、大学が個々にボランティア推進を進めるのには限界があり、全国展開をしたくても難しいのが現状である。「全国的な学生ボランティアの支援」を担うことがまさに今、日本財団、Gakuvoに求められている。委員の方々からも、日本財団の信用や資金、全国ネットワークを活かした事業・プログラムを望む声が多く挙がった。また、大学との連携だけではなく、企業・NPO・NGO・地域・行政等と上手く連携していくことも必要不可欠である。

学生への仕掛け方には工夫が必要だ。「ボランティア」という言葉が持つ偽善的なイメージに違和感を持つ学生には、食わず嫌いではなくまず一度参加してもらうこと、学生の心に訴えかけるようなワードを選ぶこと、「カッコいい大人」を見せたり、色々な生き方があることを示してあげること、等が考えられる。

この全4回の委員会で、現代の大学生の特徴、そこにどう働きかけをするか、全国的な学生ボランティアの拡大に向けてGakuvoが出来ること、のヒントを沢山いただいた。

おわりに——「動物園を出でよ、若者」

この委員会では、各委員から刺激的なお話、見解、そして問題提起をいただいた。

「夢は正社員です」「動物園の動物は幸せか」「ボランティアとは何か」「学生はボランティアと呼ばれることに抵抗がある」

学生に聞くと、「ボランティアと呼ばれることに抵抗がある」という。その意味を聞くと、自分にも学ぶことや楽しみもあるから、一方的に人の役に立つことをしているわけではないから、という。

一方「ボランティアとは何か」という問いに関して、私は「それは疎外されていない労働」と少々時代錯誤的な返答をした。難しい用語のような気もするが、そもそも「疎外」とは、「仲間はずれ」のことを言う。ボランティアに関する一般的な定義とはずれるが、ボランティアとは、自然環境とも仲良く、一緒に活動する仲間とも仲良く、活動の対象者とも仲良く、ボランティアによって出来上がったものとも仲良く、いろんなものと仲良くしようとする活動であると思う。もちろんときに議論は必要であろうが、「仲の良い」つまり、情緒的な関係で結ばれる世界が、ボランティアの世界であるように思う。ボランティアとアルバイトはどう違うか、という議論を文部科学省で聞いたことがあるが、それは疎外されているか否かで明確に分かれるものであろう。

少し前、ある若手の社会学者が、今の日本の若者は、自分のことを幸せと思っているが、将来に対しては不安をもっていることを指摘した。これは、委員会の中でも出た動物園の話題にも通じるように思う。現代の若者は、動物園の動物は幸せだと思っているという。安全だし、食べるのにも困らない。これこそ、現代の多くの若者が置かれている状況だろう。しかしやがて動物園から出て、社会に放り込まれることには不安を覚える。正社員が夢だと語る若者の目には、名の知れた企業とは、第二の動物園に映っているのかもしれない。

ボランティアの世界をあらわす言葉として「仲良くなる」という面を挙げた。しかしここで仲良くなるとは、動物園の中で仲良くなることではない。それだと、一般的なサークル活動と変わらない。私が考えるボランティアとは、動物園を出て、今まで触れたことのない世界——社会のなかで、今まで会ったことのない人たちと「仲良くなる」ことだ。

それでは、動物園とその外との最も大きな違いは何か。その違いとしてここでは、前者がルーチンに従っていけばことが済んでいく世界であるといいたい。そして後者が「自分で考え、行動」しないことには一歩も進まない世界である点を挙げたい。社会を自分の目で見て、自分の頭で考えて、自分の責任で行動する。前者が他律的世界、後者が自律的世界である。

これを踏まえ、ボランティアとの関連で、次の3つの方向性を掲げたい。

1. 受け身のボランティアから、主体的なボランティアへ。
2. 「単なるイイコト」から、社会変革、ソーシャル・イノベーションへ。
3. それを全国に。

阪神・淡路大震災から15年以上を経て、東日本大震災時のボランティアマネジメントは飛躍的に向上したように思う。ボランティアコーディネータやボランティアセンターが浸透し、そして機能した。さらにはボランティアバスも登場した。これらによってボランティアの効率性は飛躍的に高まったといえるだろう。しかしその反面、こと学生ボランティアにとっては、「大人の」ボランティアコーディネータやボランティアセンターが、すべての準備をお膳立てして、自分は指示に従うだけ、といった受け身の嫌いが出てきたように思う。効率性の面からみればこれは簡単に退けてしまうべきものではないが、そうではないボランティアの形も重要であろう。これを多少語義矛盾を含む言葉であるが、「主体的なボランティア」と呼び、積極的に協力したい。

第二に、ボランティアのイメージ、意味の転換をはかりたい。学生の言うとおりに、ボランティアとは、一方的な慈善行為ではない。相手だけでなく、自分にも得るものがある。そしてその得るものを倍加させ、「あなたと私」の世界から、より大きな世界へと拡大させていくことを大切にしたい。それはもはや従来のボランティアのイメージで捉えられるものではなく、いってみれば社会を変える、社会変革、ソーシャル・イノベーションといったようなものである。

そして第三に、これらの胎動を全国的に展開していく。

Gakuvo ではこれらの方向性を事業として、次のように展開していく。

第一に、Gakuvo Style Fund を創設する。ここでは学生自らが主体的となって活動している学生ボランティアグループに重点的に協力する。

第二にボランティアイメージや意味の転換としてのブランディングである。これは Gakuvo Style Fund をはじめ他の事業ともリンクさせて進めていきたい。

そして、第三にそれらをふまえ、事業を全国に展開する。

本委員会では、若者と夢も話題になった。若者だけが夢を見るのではなく、「大人」も本気になって夢を見ることが不可欠だとのコメントも頂いた。たしかにうなずけるコメントである。しかし私が想定する夢とは、大きな夢のことである。これに関しては、紙幅の関係もあり、また Gakuvo のホームページのあいさつ文でも述べているものなので繰り返さないが、簡単に言うと、大きな夢とは次のような夢だ。「この世の中で何があろうとも、ぜったいに戦争が起こらないような世界にしたい」「どのような事情があろうとも、すべての子どもが等しく教育を受けられるような世界にしたい」「理不尽な理由で差別され、悲しんでいる人が一人もいないような世界にしたい」。動物園の中には決して本気で見ることでできない夢だ。Gakuvo が事業を展開する究極的な目標も理想もここにある。

夢は大人も見ろべきだとの見解に関しては、こと大きな夢に関しては若者に譲りたいと思う。

「大人」は、若者が本気で夢を見ることができるよう環境を整備することに全力を注ぎたい。裏方の役回りに徹したいと思う。やはり夢を見るのは、次の時代を創る若者の特権であると思うからだ。

委員会にて貴重な助言をいただいた各委員の先生方にはこの場を借りて、あらためて感謝申し上げます。

2015年2月3日

日本財団学生ボランティアセンター

代表理事 西尾 雄志